

野生動物医学研究者が見た 図書目録

浅川満彦

東京大学出版会から拙著『野生動物医学への挑戦——寄生虫・感染症・ワンヘルズ』を刊行したことを契機に、本誌「UP」に寄稿する機会を得た（浅川、二〇二一a）。そのなかで、たとえば、野生動物医学を構成する根幹分野である保護管理（マネジメント）に関心があるのなら、環境法施行などの法学・行政学、環境破壊の原因となる困窮を解決する経済学、もう一つの原因、戦争を解決するなら国際政治学、そしてこれらをしつかり伝えるための教育学など、自然科学系に加えて人文・社会科学系の幅広い分野の知識も必要であると明記した。

しかし、正直に告白すると、少し後悔をしている。おそらく、冒頭の拙著の上梓で精神的に高揚していたのだろう。自然科学系応用分野の獣医学の世界で生きてきた「ど素人」が、無謀すぎる。だからといって、いい歳をした大人なので言いつ放し（書きつつ放し）は、あまりにも無責任。少しでも実行しなければならぬ。

ところで、野生動物医学自体、獣医学の枠にとらわれず、医学・保全生態学および前述のような自然科学以外の広範な分野と関わりをなす（図）。したがって、「異分野」にまで網を拡げた情報収集が必要である。そして、いまどきの学生ではないので（上田、二〇〇六）、私の知識吸収手段はほぼ読書のみである。実際、自分の専門（獣医寄生虫学）とは異なる野生動物学の担当を命ぜられた際も、授業の準備のため、関連書籍を片っ端から読み込んだものだ。いや、実際は、「関連すると思われる」であった。そもそも獣医学、とくに、勤務先の関係で畜産学にも親和的な野生動物学など、どのような中味になるのか、一九九〇年代前半には皆目見当がつかなかったからだ。

さて、かくのごとき「泥縄的格闘」をして数年経ったころから、せっかく読み込んだでも、忘却していくことに嫌気がさし、備忘録のつもりで書籍紹介や書評を作成するようにした。そして、さまざまな日本語雑誌に投稿を続け、大部な冊子にまとめ

られるほど蓄積した（浅川、二〇二〇）。それらは二〇〇二年から二〇一九年に刊行された一四九本で、感染症学、農学、動物園水族館学、生態学、保護管理学などに関する書籍を対象にしたものであった。

そのなかで、東京大学出版会からのものは三二冊を占め（約二パーセント）、他出版社を大きく引き離していた。このような比率となったのは、「東京大学出版会から出版されているのだから、まちがいない」といった安易な理由ではない。書籍購入時の縁はまず題名、そして著者、さらに新聞や雑誌などに書籍紹介・書評があればそれを参考にすが、出版社は眼中になかった。いや、むしろ、紹介文作成時になって初めて出版社のことを知ったことも少なくなかった。

むろん私費で買っていたときには、価格は重要な要因であった。しかし、農文協（その前は岩波書店から発刊され、二〇一九

年に第七〇巻にて休刊）の「生物科学」の編集委員に加わり、とくに副編集長として書評担当をしていたときには（浅川、二〇一六）、各出版社から献本が届くようになった。書評を「生物科学」上に掲載することを期してであったので、私は、ほかの委員に働きかけ書評原稿を依頼したし、自身でも作成した。ところが、献本数は多く、他媒体にも出したが、けつきよくすべてをこなすことができないまま休刊となった。紹介文末刊となってしまうた出版社のみなさんには、この場をお借りして心から謝罪をしたい。

閑話休題。知の源泉五冊に一冊が東京大学出版会からのものであったという事実は、やはり東京大学出版会のすごさではないかと納得してしまった。ならば、冒頭の人文・社会科学系の読書三昧も、この大学出版会刊行のものならまちがいが無いの

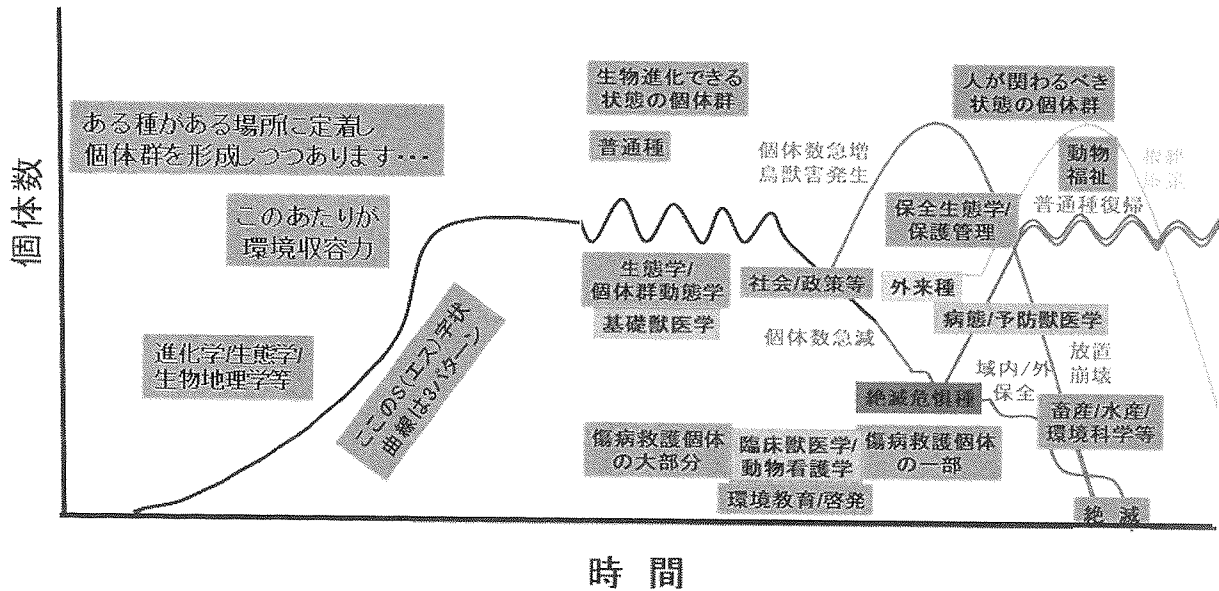


図 野生動物の個体群変動・変化に対して関わる施策・学問分野（浅川、2023 より改変）。社会学や政策学などの人文・社会科学系分野との連携が不可欠な理由は、個体数急増/急減および個体数復帰には人為的要因が強力に関わるためである。

ではないか。そのようなことを夢想していたら、その出版会から二〇二三年版図書目録が届いた。試しに、この目録上の書名と概要を参考に、法獣医学（浅川、二〇二一b）も包含した野生動物医学の進展に関わりそうな書籍を自然科学以外の「総記」から「経営・会計」までのなかからピックアップし、読書計画の参考にした。以下にいくつか書名を列挙してみる。

「総記」人と動物の関係性を提示した『動物園巡礼』、気候工学などの科学技術と社会との接点を論じた『科学技術社会論とは何か』、環境・食糧問題など技術と社会との接点を論じた『専門知と公共性』、製品開発から環境効率向上を目指した『エコデザイン』、鳥類のさまざまな事象を扱った『鳥学大全』など。

「哲学」動物利用の倫理的な問題を扱った『死の所有』、霊長類学などを参照してコミュニケーションの成立条件を論考した『見知らぬものと出会う』、現在世代が将来世代に環境問題などに対しどのような責任を負うのかを考察した『世代間関係から考える公共性』、環境問題の政治学を論じた『新出版 サイエンス・ウォーズ』など。

「語学・文学・芸術」人の言葉と鳥類の囀りとの共通性などを進化学・認知科学などから解析した『「こころと言葉」、美術における親しき動物の表象から見える日本文化の特質を論じた『兎』とわたしの日本文化』など。

「歴史」日本における種痘実践の歴史を掘り起こし、その強制の政治性を分析した『種痘という「衛生」』、東アジア地域にお

ける健康観を概観した『暮らしのなかの健康と疾病』、近代日本における「帝国医療」の実態に関しマラリア対策をモデルに示した『マラリアと帝国 増補新装版』など。

「心理・認知科学」環境が動物に働きかける影響・関係性を認知科学から概念化されたアフォーダンスや倫理的共生などから論じた『動物』、サル類の一生に生ずる母性や性差などを比較行動学的に検討した『サルの行動発達』など。

「教育」生涯学習社会において重要なNPOの可能性を探る『NPOの教育力』（野生動物保全・保護活動の多くがNPOであることからリストアップ）、農山村の再生を描いた『地域学習の創造』（いわゆる獣害問題の現場の多くが農山村であり、その衰退が被害の強度を強めていることからリストアップ）など。

「社会」農山村社会の活性化を探る『村落と地域』（リストアップした理由は前述と同じ）、環境保護や地域計画について社会学

的に論じた『転換日本』、『環境学の技法』および『環境社会学』など。

「人類学・民族学」狩猟採集民の起源と変容、地球環境史を描いた『狩猟採集民からみた地球環境史』、医学・地理学などに関連し、環境問題・健康問題を論じた『人類生態学 第2版』、国内外の鵜飼いの起源や変遷を民族学的に描いた『鵜飼いと現代中国』および『鵜と人間』、狩猟犬や鷹狩りのタカ類などをモデルにあえてドメステイケートしない事例を示しつつ人間による野生動物への働きかけについて包括的に分析した『野生性と人類の論理』など。

「地域」このカテゴリーには「アメリカ、ヨーロッパ、イスラム、中国、その他のアジア」における歴史、社会、政治、文化、地誌などに関する書籍群がリストアップされていた。よって、このような地域で野生動物医学のフィールド調査をする場

合の基礎資料となるので、拙稿での書名列挙は割愛した。

〔政治〕 足尾鉍毒事件の思想的応答を記録した『鉍毒問題と明治知識人』、税制や環境保全など自治体が直面する問題をまとめた『概説 日本の地方自治 第2版』、森林行政の史的展開を公共政策と行政官庁との相互関係から考察した『日本森林行政史の研究 増補新装版』など。

〔法律〕 環境と生命に関する科学技術と法の関係を分析し、実践レベルの提言をした『環境と生命』、環境法や都市法など行政法に焦点を当て論考した『行政法学と主要参照領域』、環境規制の実例をモデルに自治体判断の真相に迫り、生きた法の姿をとらえた『自治体現場の法適用』など。

〔経済〕 熱帯雨林の破壊や乱獲をモデルに資源をめぐる政治学の観点から政策設計を論考した『発展途上国の資源政治学』、温暖化など環境問題から経済制度を提言した『社会的共通資本』と『地球温暖化と経済発展』、社会・経済・法律などの観点から環境保全を論考した『環境と開発への提言』、『地球温暖化対策と国際貿易』および『地球環境保護への制度設計』など。

〔経営・会計〕 医療・観光など生産性向上や付加価値増大を目指した総合研究入門である『サービソロジーへの招待』など（観光には野生動物を目玉にしたエコツーリズムも含まれることからリストアップ）など。

重要な書籍が刊行されているにもかかわらず、多くの見落としに大いにあわてている。さっそく注文しよう。それにしても、今回列挙した人文・社会科学系書籍のうち、これまでに私が紹介できたのはたった一冊であったように（浅川、二〇二二）、自然科学系の人間には、書籍渉猟がむずかしいのではないか。そのような意味で、今回参考にさせていただいた図書目録は、まさに簡便かつ体系的な知のガイドブックのような存在であったことが確認された。

引用文献

- 浅川満彦、二〇一六。巻頭言『生物学』の書評欄——原稿用紙四枚の格闘技、生物学、六七・六五。
- 浅川満彦（編著）、二〇二〇。酪農学園大学野生動物医学センターWAM Cメンバーによる書評・書籍紹介集、酪農学園大学地域連携センター、江別・二三八ページ。
- 浅川満彦、二〇二二a。野生動物のお医者さん、UP（東京大学出版会）、（五八五／二〇二二一年七月号）・八一―三。
- 浅川満彦、二〇二二b。野生動物の法獣医学——もの言わぬ死体の叫び、地人書館、東京・二五四ページ。
- 浅川満彦、二〇二二。書評『鵜と人間——日本と中国、北マケドニアの鵜飼をめぐる鳥類民俗学』、農業と園芸、九七・四六七。
- 浅川満彦、二〇二二。ブックガイド『コアカリ野生動物学 第2版』、農業および園芸、九八・印刷中。
- 上田恵介、二〇〇六。巻頭言 学生と読書、生物学、五七・六五。

（あさかわ・みつひこ 野生動物医学）